



Vol. 10

発行日 2010年 12月1日

大阪学院大学／大阪学院短期大学
国際センター ニュースレター

1. 第49回 岸辺祭“OGU国際通り”

前号でもお知らせしたように、10月22日から24日に開催された岸辺祭に留学生がブースを出店しました。お天気にも恵まれ、参加者全員が協力して、盛り上がりのうちに終えました。今号では、参加した留学生、ISSTメンバー、OGU学生、教員、スタッフを代表して3名が、それぞれが見た岸辺祭をレポートしてくれました。

国際学部3年次生 萩野 沙那恵

私はISSTのメンバーですが、今回の岸辺祭は参加する留学生の数が増えて、規模も大きくなったので、すごく楽しみにしていました。まず今回は前回と違い留学生メインで進んだので、チームリーダーも留学生で、準備からシフト管理まで彼らが中心になって行いました。私を含めてたくさんのOGU学生たちが、各チームの留学生リーダーの指示の下、ブースの運営を手伝いました。私のチームは、留学生とOGU学生間のミーティング不足などがあり、当日まで自分の役割がわからず、困ったこともありましたが、しかし、当日になると、初めての岸辺祭だったにもかかわらず、留学生たちは困ったことがあれば助けてくれ、販売の呼びかけやブース内の作業なども先頭に立って動いてくれました。それを見て私も自分の出来ることから協力し、頑張ってるぞという元気が出て、岸辺祭をみんなで楽しもうという気持ちになりました。また留学生たちもみんな協力をし、たくさんの人たちとコミュニケーションを取り、楽しそうにしていたので、参加した全員にとって良い思い出になったと思います。また、お互いが協力しなければブースの運営はできないこと、そのためには自分の意見を述べ、やるべきことを責任を持つてることがいかに大切かを私は留学生たちを通して学びました！これからもISSTメンバーとして留学生をサポートしていきます！

留学生 キム・ピルジュ

(韓国 スンチョンヒャン大学)

私たちがずっと頭を痛めながら取組んできた岸辺祭が無事大成功に終わりました。岸辺祭の準備はとても大変だったのですが、チームのメンバーがお互いに助け合いながら準備をする中で、それまではあまり親しくなかった留学生やOGU学生と同じチームということで親しくなれました。私が韓国にいた時よく食べていたトッポギやチヂミなどの食べ物を作り、岸辺祭に来たたくさんのお客さんに私の好きな食べ物を食べてもらえて嬉しかったです。とても大変だったけれど、楽しい3日間でした。岸辺祭での収益は、チームの大多数の意見によって大部分を寄付し(寄付先は後日決定の予定)、残りのお金は岸辺祭と一緒に取組んだチームメンバーたちと嵐山に行くときに使う予定です。韓国に帰る時、ここでの楽しい思い出を持って帰れることがとても嬉しいです。

“OGU国際通り”メニュー

アメリカ: グリルドチーズサンド
中国: 水餃子、卵スープ、えびせんべい
韓国: トッポギ、チヂミ、ゆず茶
ヨーロッパ: 豆スープ、パンケーキ



目次:

第49回岸辺祭“OGU国際通り”	1
夏期海外研修: 松川 秀行	2
OGU正規留学生:	2-3
李 継法 & 王 大亮	
日本・ASEANユースリーダー	3
ズサミット参加レポート	
三崎 大地	
ホストファミリーの心がけ	4
国際センター News	4

I-Chat Loungeスタッフ

ラッセル・スミモ

学生たちにとって岸辺祭は、忙しいけれど楽しい10月のイベントです。今年は昨年に比べてさらに規模の大きなものとなり、73名の留学生、ISSTメンバー、OGU学生、教員、スタッフが、4つのチームに分かれてブースを出店し、アメリカ、中国、ヨーロッパ、韓国の料理を販売しました。

私はスタッフ側からのリーダーとしてヨーロッパチームに参加しました。このチームにはフィンランドからの留学生トニー・ヘイキラ君という素晴らしいリーダーがいたので、彼にすべてを一任しました。このチームを他と比較すると文化的な面白い違いがありました。アメリカチームは注文が入ってから準備します。中国と韓国チームは注文が入る前に料理を準備します。そしてヨーロッパチームはといえば、“豆(ピー)スープ”を販売しました。準備にも販売にもあくせくすることなく、常にのんびりとしていて、岸辺祭の3日間にわたり一番リラックスして楽しんでいました。4つのチームは競争することもなく、たくさんの料理を準備し、全員が協力して一生懸命働き、最後には予想以上の売り上げが出ました。週末を返上して参加してくれた学生たちに感謝します。そして参加した留学生、ISSTメンバー、OGU学生、教員、スタッフ全員にとって、この大阪学院大学での岸辺祭がいつまでも思い出に残るものになるであろうことを願っています！

2. “夏期海外研修に参加して”：経済学部 3 年次生 松川 秀行

松川君は今年の夏期海外研修で、カナダのメディシンハット大学で実施された3週間の英語研修に参加しました。目的意識の高い松川君は、3週間と言う短い期間であっても、人一倍多くを学び帰国しました！

この研修に参加したことは私にとってとても貴重な経験になりました。この研修では英語の勉強だけではなく、日本にいただけでは感じることができないことを体験できたからです。

なぜこの研修に参加したかという、単純に「英語が勉強できる」というのが一番の理由でした。私は将来、航空業界に就職したいと思っています。航空業界では英語が必要不可欠なので、少しでも英語が理解できるようになることを目標に参加しました。

でも実際に参加するにあたって、不安がありました。それは、何よりも英語が話せないことでした。私の場合は話せないだけでなく、英語がとても苦手でした。「英語が話せないのに参加して大丈夫なのか」と、とても不安だったのです。しかし、その不安はホストファミリーと生活する中で、徐々に無くなって

いきました。ホストファミリーはとても親切で、私が理解しやすい簡単な単語を使って、普段よりも話すスピードを落として話してくれ、常に声を掛けてくれました。そのおかげで不安がなくなっていき、英語でのコミュニケーションが取れるようになっていきました。

現地で驚いたことを一つ紹介します。カナダに行って一週間ほど経った頃に、ウォールマートという大きなスーパーマーケットに行きました。ウォールマートには生活に必要な物がすべて揃っていますが、家電売り場を見て驚きました。日本製の家電がほとんど無かったのです。「カナダだから当たり前じゃないか？」と思われるかもしれませんが、そこに置いてあったのは韓国製の家電ばかりでした。最近よく耳にする「サムスン」という会社の製品で、なんと売り場の9割はサムスン製品で占められていました。値段を見ると日本製の半分以上で、日本製も置いてありましたが、値段が高すぎて買えるような値段ではありませんでした。携帯電話を例に出すと、韓国製が2万円に対して日本製は10万円ほどしていました。日本では日本製が当たり前です。しかし、少なくともカナダでは韓国製の製品が当たり前になってきていること

に驚くと同時に、日本が徐々に他の国に抜かされていくのではないかと不安も感じました。

この研修に参加して、カナダの方々の親切な心遣いに触れ、文化を学ぶことができました。この経験は言葉で言い表せない貴重な経験になりました。今では英語にとっても興味を持ち、英語の勉強に力を入れています。来年の夏には、ホストファミリーに会いに行く約束をしています。会うまでに英語でコミュニケーションが取れるまでにレベルを上げたいと考えています。海外研修は、留学や語学に興味を持っている人に自信を持って勧めることができるプログラムです。



メディシンハット大学のスタッフたちと
(本人 左から2人目)

3. OGU正規留学生：経営学部 1 年次生 李 継法 (リ・ジファ) 大学院商学研究科 修士課程 王 大亮 (ワン・ダリャン)

国際センターでは、海外提携大学からの交換留学生と短期の私費留学生のみを受け入れていますが、OGUのキャンパス内では、現在中国と台湾から来た5名が大学で、タイから来た1名が短大で、中国から来た3名が大学院で、合計9名の正規留学生が学んでいます。まだまだ全体の学生数からすると割合は低いですが、彼らは言語や文化の壁を越え、他のOGU学生と一緒に一生懸命勉強をしています。彼らの勉学に対する真摯な態度から学ぶことも多いと思います。今回は、中国出身の李 継法君と王 大亮君が寄稿してくれました。

李 継法「僕の留学生活」

日本に留学してよかった。これが一番伝えたいことだ。正直に言うと、留学する前の僕はただ両親に頼るだけの若造だった。何も知らずに成長しているだけだった。けれど、日本に留学して以来、自分自身が変わっていく気がした。日本に来たばかりの頃、本当にいろいろ苦労した。特に、伝えたいことがちゃんと伝えられないのが一番困った。それに大学1年生になった時も、本当につらかつ



た。一人暮らしで何でも自分がやらなければならぬ。バイトしながら学校に通うなんて、高校の時に話には聞いていたけど、まさか自分自身が体験するとは。正直に言うとしんどい。でも、今まで体験しなかったことをいろいろ体験したら、案外おもしろかった。生活も充実するし、もし自分自身が体験しなかったら、その楽しさは永遠にわからなかった。バイト先の店では、毎日笑って過ごしていて、日本人の友達もできるし、彼らからもいろいろ学ぶことができる。まさに一石二鳥だ。「頭を使って何かをする」これは店で勉強したことだ。確かに世の中には難しいことがいっぱいあるけど、できないわけではない。頭を使えば何でもできるはずだ。それに、大学の生活もとても楽しんでる。いろいろな活動に参加したり、覚えた日本語で日本人の先生や友達と話したり、先生たちに認められたり、これ以上嬉しいことはない。勉強の

楽しさもようやく分かってきた。特に、国際センターの先生方はお兄さん、お姉さんのように優しくしてくれて、あらためて家族の匂いを感じた。本当に感謝している。もし、困ったことや悩みがあったら、国際センターに行けば！？とにかく、国際センターの先生方は家族のように面倒を見てくれる。今、僕は英語に熱中していて、今度は交換留学生としていろいろな国に行きたい。これは、目標の一つだ。目標があれば、人は進歩できる。少なくとも僕はそう思う。留学生活を通じて、知識とか、経験とか色々なものを得た。それに、見える世界も広がったし、精神的にも強くなったし、日本に留学して悔いはない。今は心からそう思う。これからも前にどんどん進むぞ、楽しく生活しなкや。Fight!

王 大亮「私とChat Lounge」

私は中国の大学で日本語を専攻し、卒業後は中国遼寧省大連市にある小さな会社に就職しました。初めて仕事をした私は日本人との会話が上手く出来ませんでした。新人だからだと思っていましたが、優秀な同僚に経験と専門知識が欠けているためだと言われ、挫折感を味わう日々でした。営業部に所属し、日本人の顧客と中国人のオーナーとの板挟みになって悩み

苦しんだ経験が、私に日本への留学を決意させました。

日本での留学を通じ、日本語だけではなく、英会話も上達するとは夢にも思いませんでした。しかし、大阪学院大学への入学がこれを実現させました。それはI-Chat Loungeのお陰でした。ほのぼのとした雰囲気、親切なスタッフたち、清潔な内装、無料の飲み物、英会話ができる空間、これがOGUのI-Chat Loungeです。

I-Chat Loungeとの初めての出会いは、私がISSTメンバーとして、留学生たちにキャンパスツアーをした時のことでした。“Hello! How do you do? I am Leilani.” 親切的なレイラニさんからの温かい挨拶の言葉を今でも覚えています。残念ながら、その時の私はあまりの緊張で、“Nice to meet you.”さえ忘れてしまい、結局、日本語で返事をしました。いろ

んな国の人たちが一緒に座って、笑ったり、喋ったりしていても、少しも違和感を感じませんでした。その時から、外国語でのコミュニケーションは本当に楽しいものだと感じました。人種が違い、言葉は違っても、コミュニケーションには国境なんてないんだと改めて気付かされました。

私がI-Chat Loungeのスタッフたちから習ったものは、英会話だけではなく、人に接する態度、仕事に対する態度、生活に対する態度でした。自分の気分がどうであれ、学生たちに向かっていく時はいつもニコニコの笑顔、終業後、I-Chat Loungeの活動を必死に工夫している姿、人の悩みを聞き、励ますと同時に、彼ら自身も頑張っている明日へ向かう勇気を持っていることに感動しました。

I-Chat Loungeとの付き合いはたったの2年ですが、この2年間の体験は、私にとっ



て一生の宝物です。卒業するまでは、まだ半年ぐらいありますが、修士論文に追われるため、I-Chat Loungeに行く時間が少なくなるかもしれません。でも時間があれば必ず行くと、固く決心しています。

ところで、プラス思考で、何も恐れず、勇敢に奮闘することは私がI-Chat Loungeから学んだもののなので、それを常に心に持ちながら生きていくと、どこに行ってもそこが私にとっての“I-Chat Lounge”になるのではないかと考えています。

4. 日本・ASEANユースリーダーズサミット参加レポート～国際学部 3年次生 三崎 大地

日本・ASEANユースリーダーズサミットとは、内閣府と財団法人青少年国際交流推進センターが日本とASEAN諸国、さらにはASEANそのものとの連携を強化するために開催している合宿型の国際交流プログラムです。全国で18歳以上30歳までの青年100名の募集があり、なんとOGUの国際学部3年次生三崎 大地君が見事選ばれ、参加しました。このサミットでは、ディスカッションはすべて英語で行われ、ミシシッピ大学での1年間の交換留学で得た経験を活かすことのできる貴重な機会となったようです。

10月30日から11月2日まで東京都代々木にある国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた日本・ASEAN ユースリーダーズサミットに参加してきました。このサミットでは、合宿形式の研修を通して、ASEAN諸国10カ国から来日したユースリーダーたちと協力して展示やディスカッションなどをしました。各国大使館、内閣府、皇族からも代表者の出席があり非常に盛り上がりました。

皆さんもご存知の通り、世界には貧困が存在します。貧困地域ではインフラの整備が整っていません。また、政治、宗教、歴史が絡んだ紛争が絶えず起きています。その結果、学校がない、教科書や筆記用具がないなどの理由から、十分な教育が受けられない子どもたち、病院や医療器具がなく病気の治療が受けられずに苦しんでいる人たちがたくさんいます。先進国が中心となりそのような発展途上国の開

発に取り組んでいます。上手くいっていないのが現実です。日本も毎年高額の支援金を海外の国々に支出していますが、それが軍事費に使われたり、どのように使われているのかもわかっていない部分もあります。これは世界の大きな問題です。我々青年に何かできることはないのか。このサミットのテーマ「青年の社会参加～より良い社会に向かって(Youth Participation in Social Activities – Towards Better Society)」の中にもある「より良い社会」を創るために我々に何ができるのか、集まった若者たちが英語でディスカッションをしました。最後に参加者全員で以下のことを確認し合いました。より良い社会には4つの事が必要だということです。1. 質が高くアクセスしやすい教育。2. 持続可能な環境。3. バランスのとれた経済。4. 繋がりがあり誰にでも発言権のある社会。私たち青年ができることには限りがありますが、募金活動や植樹活動などの活動は可能です。しかし、何よりも重要なのは、人と人との協力です。協力するためにはお互いの文化やバックグラウンドなどを尊重し合わなければいけません。

このサミットを通して思ったことが2つあり



上: サミットの会場で
右: フィリピンからの参加者と

ます。それは、自分はまだまだ無知であるということ、そして世界を知るためには、コミュニケーションツールとしての英語が絶対に必要不可欠だということです。私は大学生になってから個人で海外旅行に行ったり、OGUの海外研修や交換留学に参加したこともあり、海外経験にはある程度自信がありました。しかし、今回、もっと海外経験が豊富で、知識も私より遥か彼方の上にいる青年たちにたくさん会いました。そのような人たちと話すのは楽しかったですし、私にとってはとてもチャレンジングでした。また世界、日本を問わず、同じ世代なのにそのように頑張っている人たちがたくさんいるとわかったことはとても刺激になりました。また今回のサミットで、その人たちと同じ土俵に立ち、英語で会話ができたのは、今後の自信につながりました。これからも世界に目を向け、英語に磨きをかけ、今以上に勉学に力を注いで、多くの知識を身に付けていきたいと思います。

私は、このサミットで今後募金活動をしている場所があれば、率先して募金をするという約束をしました。私たちの小さな行動が世界で困っている人々を救えると思います。皆さんも何か小さな事で良いので、より良い社会創りのために行動を起こしてください！



5. ホストファミリーの心がけ Part 7～寺村優子

苦情がある時は

これまで私自身もホストファミリー(以下HF)をしてきましたが、他のHFが大学の国際センターに対して、次のような要望をされているのをよく耳にします。「国際センターの方から留学生本人に注意してください。」「留学生には、HFが文句を言ったと言わないでください。一般的な話として留学生に注意を促してください。」

国際センターはオリエンテーション時に「○○をしてはいけませんよ。○○を守らないはいけませんよ。気を付けてください」と、教育していただきます。しかし、当の本人たちは「へーえ。そんなんするような悪い学生してるの？許せんや。誰やそれ？ぼくは、ちゃんとしてルールを守ってホストマザーに気に入られているよ。はっきりいって、僕みたいなよーできた生徒はちょっとおらん」と考えていることが多いです。このように、一般的な例として国際センターから忠告をした場

合には、改善してほしい点が本人に伝わりにくいものです。HFにしてみれば、「国際センターに苦情を言ったのに留学生の態度は何も改善されてない」と、ますます不満がつり、留学生にしてみれば「注意なんてされてない。自分は間違ったことをしていない」と思っている場合が多いです。

そのため、苦情がある時にはご家族が本人にはっきり注意するのが一番いいのです。しかし、お互いの語学力ではちょっと無理だから国際センターに助けてほしいという時もあるでしょう。しかしその場合も、「私が言ったと言わないで」は良い解決方法とは言えません。該当する留学生に対して、はっきりと、「いつ、どこで、何を、またはしてなくて、HFから改善の要求がきましたよ」と伝えない限り、留学生を含めた家族全員が居心地の良い生活を送るのは難しくなるでしょう。たとえつたない言葉のやり取りであったとしても、やはり本人同士が気持ちを

伝えあうことが、お互いが円満に生活できる秘訣になるのではないのでしょうか。

2009年9月号より連載させていただきました、寺村優子さんの「ホストファミリーの心がけ」も今号で最後となりました。2010年度の国際交流プログラムには、32のホストファミリー、9のホームビジットファミリーにご協力いただいております。初めての方もいらっしゃる、ホストファミリー歴10年以上という方までいらっしゃいますが、この連載が多くの方々のお役に立てばと思っております。また国際センターでは、ファミリーの方々と国際センター、またファミリーの方々同士のコミュニケーションが円滑に進むよう、交流会などのイベントを企画しております。このようなイベントで各ご家庭の「ファミリーの心がけ」について情報交換をしていただき、交流していただければと思います。

それでは、今後とも国際交流プログラムへのご理解とご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。

6. 国際センター News

2010-2011

派遣交換留学春出発

今年度より交換留学の出発時期が年2回となりました。これまで3年次生の秋に出発する学生から、就職活動との時期が重なるため留学しにくいという声がありましたが、春に出発することで、3年次生の前期に留学をし、就職活動がスタートするまでに帰国することができるようになりました。10月に春出発の募集をしたところ、外国語学部2年次生の福田 汐理さんと大山 真惟子さんが新たに交換留学生として、来年2月にそれぞれ台湾の静宜大学、オランダのフォンティス応用科学大学に出発していきます。OGU学生の皆さん、さらに広がった留学のチャンスをつかんでください！



大山さん(左)、福田さん(右)

韓国提携大学訪問

10月下旬に韓国にあるスンミョン女子大学、スンチョンヒャン大学、ベツソク大学、ベジェ大学を訪問してきました。この訪問を通して感じたのは、どの大学も積極的に海外からの正規留学生を受入れていること、そして英語教育に力を入れていることです。先

日、大阪府の橋下知事が韓国の先進教育を学ぶ目的で訪韓しましたが、私も今回の訪問を通して、日本の大学と比較して韓国の大学の方がよりグローバルな社会で通用する人材育成に力を注いでいると感じました。それぞれの国で状況が違えば、同じアジアの国として私たちが学ぶことは多いと思いました。

韓流ブームにより2国間の関係は近くなったようにも思いますが、韓国はこれまでの歴史的背景もあり、近くて遠い国といわれてきました。だからこそさなる協調と理解を進めるために、大学生が現地の人々と接し、文化、習慣を学び、共有することが重要になるのではないかと思います。あなたも一番近い留学先に行ってみませんか？ (M)



(上)ベジェ大学に留学中の大西さんと同大学の留学生担当 金 讀基さん

(下)スンチョンヒャン大学に留学中の高木君、新田君、柴田君、阪口君(後方左から)

“Coffee Break”

11月15日に教員と国際センターの交流会“Coffee Break”を開催しました。この交流会は、教員の方々に国際センターの活動をご理解いただき、どのような形で双方が協力できるのかを模索していくという趣旨で、昨年から開催しております。今回は、派遣・受入れ留学、海外研修、I-Chat Lounge、ISSTについて説明をさせていただきました。帰国留学生たちにも協力をお願いして開催した交流会には、21名の教員の方々にご参加いただきました。今後もこの取組みが学部と国際センターを結び実りあるものになるように継続していきます。



参加された教員の方々に留学体験を語る
経済学部4年次生 山本 雄仁君

～編集後記～

早いもので今年も年末を迎えました。日ごろより国際センターの活動にご尽力いただき、国際センター、I-Chat Loungeスタッフ一同より感謝しております。来年もOGU学生、海外留学生のサポートに邁進してまいりますので、よろしくお願いいたします！皆様良いお年をお迎えください。 (M)

大阪学院大学・大阪学院短期大学 国際センター

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

Tel: 06-6381-8434(代) Fax: 06-6381-8499 Email: inoffice@ogu.ac.jp